

派遣報告

(1) 派遣全体を通じて



姉妹都市ボッパルト市を訪問して

青梅市長
浜中 啓一

このたび、第16回青梅市青少年友好親善使節団の団長として、10名の青少年と共に姉妹都市であるドイツ・ボッパルト市を訪問しました。

今回の団員は、中学生から大学生までの幅広い年齢層でありましたが、非常に明るく、年齢差を感じないほどまとまりのあるチームとなりました。

団員は、全員がホームステイをすることで、ドイツの家庭や文化を肌で感じることができました。これも、姉妹都市交流ならではの貴重な体験だと思います。

私のホストファミリーは、夫婦2人暮らしの御家庭で、御主人は経営コンサルタント、奥様はボッパルト市の助役をされている方でした。ホストファミリーにはフリータイムなどに様々な所へ連れて行っていただきました。特に、印象に残っているのは、郊外の公園で行われたオープンエアコンサートです。これは、ピクニック形式で飲食しながらクラシック音楽を聴くという、リラックスした雰囲気でのコンサートでしたが、ボッパルト市の政財界の方が多く来られていて、社交の場になっていました。そして、身近にクラシック音楽を楽しめる場があることに、ドイツの音楽に対する懐の深さを感じました。

ボッパルト市では、ローマ時代の遺跡や歴史ある教会等の美しい街並みを目に焼き付けてきましたが、私が一番思い出に残っている景色は、悠々と流れるライン川です。国際河川であるライン川は多くの船が往来し、1日中眺めていても飽きることはありませんでした。私たち青梅市民が多摩川を愛するのと同じように、ボッパルト市民もライン川をこよなく愛しているということを強く感じました。

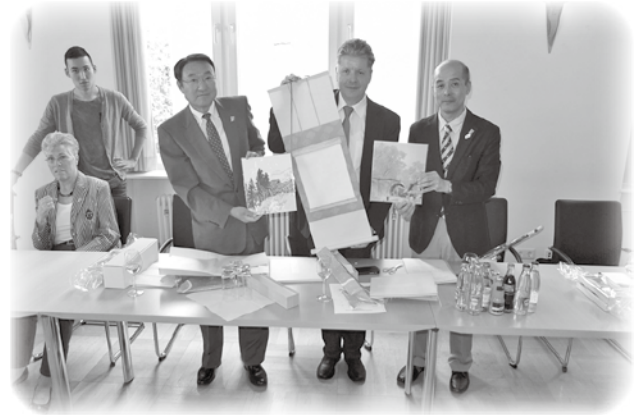
また、青梅市は2020年の東京オリンピック・パラリンピック大会に向けてドイツのホストタウンに登録されたことから、ベアシュ市長および今回の私たちの訪問に合わせてボッパルト市へお越しいただいた在フランクフルト日本国総領事館神山総領事に対して協力のお願いができたことは、大変有意義であったと思います。

ボッパルト市で過ごした毎日は、団員にとって生涯忘れることのない、刺激的でキラキラと輝く日々でした。それだけにお世話になった皆様との別れはつらく、最後のフランクフルト空港では涙を流しながらのお別れとなりました。

今回は私にとって初めてのボッパルト訪問でありまし

たが、ボッパルト市職員や友好協会、そしてホストファミリーの皆様への心こもったおもてなしに、姉妹都市提携50年という両市の交流の深さを改めて感じる事ができた10日間でした。

参加した団員には、今回の感動、感謝の気持ちを忘れず、両市の交流を担うリーダーとして活躍され、これからの友好親善が一層深まることを心から期待しております。



ボッパルトで得たもの

桜美林大学1年
北 未来

私は、今回の第16回青少年友好親善使節団の一員として、青梅市と姉妹都市であるドイツ・ボッパルトを訪れ、この10日間に様々な貴重な体験をしました。

私が今回の派遣に応募した動機は、高校時代に短期留学を経験し、それを機に海外、特にヨーロッパの文化や歴史、社会に強く興味をもったこと、また、外国人の友達をたくさん作り視野を広げたいと考えたからです。

フランクフルト空港に着くと、まず、数名のボッパルトの方々が、空港まで迎えに来てくださいました。ここで私は、本当にドイツに着いたとことを実感しました。バスで約2時間高速道路を走ると、ライン川沿いに自然豊かな街、ボッパルト市が現れました。私たちが到着すると、今回の団員を受け入れてくれるホストファミリーであろう方々が盛大に歓迎してくれました。そんなところからもボッパルトの方々の温かさが感じられました。

それからホストファミリーとの初対面でした。私のホストファミリーは、お母さんのマティーナ、私と同年の男の子ファビオと14歳の妹のアーナの3人家族でした。私はドイツの家のイメージがあまりなかったので、どんな家なのかとても期待しながらホストファミリーの家へ向かいました。今回お世話になった家族の家はとても綺麗に手入れされた庭とバルコニーがあり、ここで9日間生活することに、とても興奮しました。

私がボッパルトで体験した中で、特に印象に残っていることが2つあります。一つは、18日に行われた歓迎パーティです。このパーティには、同じ年代の方から年配の方、フランクフルトにある日本領事館の方たちが参加した盛大なものでした。そんなパーティで、私たち団員一人ひとりが拙いドイツ語で自己紹介をしていく場面があり、私は「もっとドイツ語を勉強しておけばよかった」と思いました。しかし、実際に自己紹介を終えた後、ボッパルトの方々からの温かい拍手のお陰で、私は「語学を話すことは完璧でなくても、一生懸命伝える」という気持ちが何よりも大切だと言うことを痛感しました。

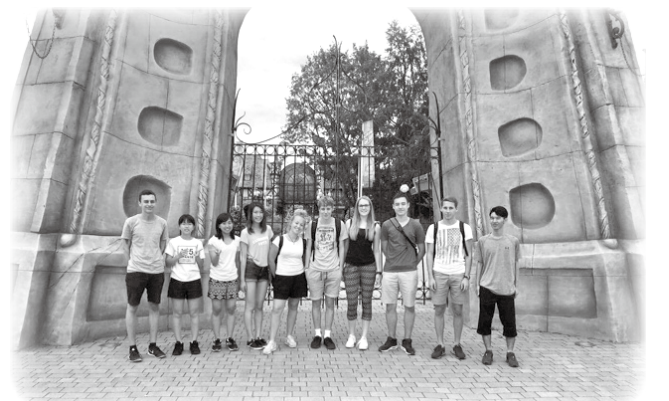
そしてもう一つは、ボンにあるドイツの歴史博物館を見学したことです。ここには、主に第二次世界大戦、近代史のドイツの事をメインに展示してある施設でした。この博物館を訪れて感じたことは、戦争当時ドイツはかなり荒れていたことやユダヤ人虐殺など自分の国を恥じるものばかりでした。日本でもこの様な博物館はありますが、自分たちが加害者となったことをメインにして

いる博物館は見たことがありませんでした。ここで私は、日本とドイツの歴史への一人ひとりの意識の違いというものを感じました。

今回の派遣を通して様々な事を学び、新たな経験をたくさんすることが出来、自身の視野、考えも成長したように感じられました。

こんな貴重な体験をさせていただけたことを、今回の派遣に携わった方々全員に本当に感謝し、また、嬉しく思っています。

今後も、ボッパルト市と青梅市の交流が続くように、私も、ボッパルトの方々が青梅に来られた際は、同じように温かく歓迎し、楽しんでいただけるようにお手伝いさせていただきたいと思いました。



ボッパルトでの素敵な体験

桜美林大学1年
奈良野 りさ

私は、今回のボッパルト派遣に当たっての目標は、現地の人と交流し沢山の友達を作ることと、国際問題など深い会話をする事でした。私はその二つの目標を大きく成し遂げることができたと思います。

私のホストシスターのヤナは、私と同年の女の子です。何回もパーティに連れて行って来て、地元の同年の子たちに私を紹介してくれました。ですが、そのパーティは多いときは三十人ドイツ人がいるなか日本人は私たった一人だけ、ドイツ語で周りにはあふれている中、それを理解できないのは私だけで少し不安になりました。しかし、こんな沢山のドイツ人と交流する機会があるのに自分から積極的にいかなかったら必ず後悔すると思い、自分が話せるたった三文のドイツ語を話しかけに行ったり、ヤナがドイツ語を英語に訳してくれたりしたおかげで、徐々に話すことができ最終的にはそこにいる沢山のボッパルトの人から話しかけに来てくれました。そこにいた人たちは、初めて会った人なのにまるで本当の日本の友達のようにパーティを楽しみ、さっき感じていた不安は思い出せないくらい帰りたくない気持ちでいっぱいでした。

他の日には遊園地に行ったり、ヤナとローラースケートをしたり、プールで泳いだり、英語があまりわからないお父さんと二人だけで買い物に行って身振り手振りで会話をしたり、BBQをしたり、Kölnという町で大量のハリボーを買ったり、さよならパーティでみんなで踊ったことなど、思い返すと止まらないくらい沢山の幸せな思い出を交流を通して作ることが出来ました。

深い話をするという目標では、今ドイツで問題となっている難民受け入れをどう感じているかなどを聞きました。私はテレビのニュースで、難民を受け入れるのは資金がかかるし暴動の原因となる恐れがあるので反対している人たちのインタビューを見たことがあります。そのため、きっと反対なのだろうと思っていたけれど、私が聞いた人は、確かにそれらのリスクはあるけど、受け入れなかったために沢山の罪のない人が亡くなってしまふのは嫌だと、難民受け入れに賛成でした。

この時、テレビで放送されている事がすべて現地の人声ではないのだと改めて思い、国際理解や交流をするにあたって、もっと世界で起きているニュースを知るべきだと強く思いました。

その二つの目標を成し遂げるに当たって、友達を作るには、お互いの言語があまりわからなくても殻に閉じこもらずに、自分から積極的に話しかけに行くその一歩

が大切だと学びました。

しかし、国際問題などの会話をするには、先ず、今世界で何が起きているのかを理解すること、次に、お互いが理解できる言語がないと難しいと思います。ですが、このことが出来ると新しい意見を自分に取り入れられ、また、見えてくる世界が違うと思います。

この二つのことを、大学生活にも生かしていき、更なる国際理解や国際交流をしていきます。

私は、日本に帰ってきた今でも、ヤナはもちろんボッパルトの友達とメールなどのやり取りをしています。このような素敵な人たちと出会えた事は、私の一生の宝物だと思います。

帰りの空港では、感謝の気持ちと友達と会えなくなるのが寂しくて、このままボッパルトに残っていたい気持ちでいつまでも涙が止まらなかったです。また是非日本でもドイツでも再会したいと心から思います。

いつも私の隣にいてくれていろんなところに連れて行ってくれたヤナ、本当の家族のように温かく迎えてくれたホストファミリー、ボッパルトの友達、なによりこのような素晴らしい機会を作っていただいた全ての人に感謝し、青梅とボッパルトの姉妹都市交流が何十年も続くことを祈ります。



明星高等学校2年
村木 愛

2年越しの夢がかなったボッパルト訪問。前回、引率でボッパルトへ行った泉中の小林先生からボッパルトの話はたくさん聞いていたので、どのような所なのか想像していました。ですが、実際は想像よりも美しい街並みと自然に囲まれていて、どこか青梅と似ているところがありました。

ドイツに着いて案内板を見ると、英語表記だと思ったら、「Ä」「Ö」「Ü」という文字を発見して、ドイツ語だとわかりました。内容が全く理解できなくて、これから9日間大丈夫かな？と少し不安になりました。また、日本のトイレのマークは色分けされていますが、ドイツのトイレのマークは男女共に黒で書いてあるので、近くまで行ってみないと分かりませんでした。日本から離れて、ある意味日本の「おもてなし」を実感した瞬間でした。

不安と期待で始まったボッパルトでの生活。私がホストファミリーと仲良くなったのは、ドイツ語しかしゃべれないお母さんが1日目の夕飯の時に、いきなり「いただきます。」と言ってくれたのがきっかけです。日本に興味があるんだなと思い、とても嬉しかったです。家族全員で「いただきます。」と言って夕飯を食べました。最後にデザートを出してくれたので、私はさっきのお返しに「Danke！（ダンケ）」と言いました。みんな笑顔で嬉しそうでした。

今回の派遣での私の目標は、ボッパルトについて学ぶことと同時に、日本や青梅のことを伝えることでした。私は、お母さんにけん玉をプレゼントしました。私が教えてあげると、毎日練習していました。4日目で小皿に乗せられるまでになっていました。日本文化に興味を持ってくれて、本当に嬉しかったです。また、持って行ったお米で梅干しおにぎりを作りました。初めて食べるのりと梅干しにドキドキワクワクしているファミリーの姿、今でも忘れません。梅干しを食べたとき、凄い不思議な顔をしていたのが印象的でした。あまり口に合わなかったのかな…

ボッパルト滞在中は、市内の遺跡や教会、古城の見学などを通し、ボッパルトの豊かな歴史、文化、自然に触れることができました。私にとって、ボランティア消防団の高層ビル救助訓練を実際に体験できたのは、とてもいい経験になりました。ロープを使った救助訓練は高いタワーで行ったので、本格的で消防士になった気分でした。また、消防ボートは2回も乗せていただき、放水までしてくださいました。ライン川沿いの火災は消防ボートから消火することができ、凄いなと思いました。

びしょびしょに濡れたけど、楽しい思い出になりました。

消防ボートから見る周りの山々は、ぶどうの木でびっしりでした。ずっと見ても飽きない景色、いつまでも忘れません。本当に貴重で素晴らしい経験ができました。

日曜日のフリータイムは、ホストブラザーのミハエルくんの運転で holiday park に行きました。高速道路をもの凄いスピードで走るので、速すぎるドライブにドキドキしました。奈良野さん、北くん、高橋さんも一緒に行きました。日本では見たことのない乗り物も多く、みんな何度か乗りました。特にジェットコースターは、すごく怖かったけど4回も乗りました。的当てゲームの景品にマリオとルイージのぬいぐるみが飾ってあり、日本のアニメは海外でも人気だということを実感しました。英語でおしゃべりをして、本当に楽しい時間を過ごすことができ、とても幸せでした。

ボッパルトで過ごした9日間。とっても短かったけどとっても深かったです。思い出も友達もたくさんできました。第16回青梅市青少年友好親善使節団の一員として、ボッパルトに行くことができて本当によかったです。

最後に、この派遣に携わったすべての方々へ感謝いたします。ありがとうございました！

これからはもっと英語とドイツ語を勉強し、ボッパルトと青梅の友好の架け橋になりたいです。



ボッパルト派遣を終えて

東海大学菅生高等学校1年
中野 正太

第16回青梅市青少年友好親善使節団員として、ドイツのボッパルト市に行ってきました。

過去に何度かホームステイを受け入れたことはありますが、ホームステイに行くのは今回が初めてでした。

私は今まで、「何で知らない人の家に泊まりに行くの？ホテルでいいじゃん。」と思っていました。ホームステイを受け入れてからは考えが変わり、私も行ってみたいと思うようになりました。今回初めてホームステイでお世話になった御家庭は、今年の3月に我が家にホームステイしたルカの家だったので、不安は少しもありませんでした。

ボッパルト市内のルカの家に到着後、まず、家の中を案内してくれました。自宅は、日本と同様に靴を脱いで入る形式でしたので、靴下を脱いで過ごしていると体が冷えました。ルカの部屋に行ってベッドを見て驚きました。ルカが使っていたベッドはロフトベッドでした。広い部屋なのになぜだろうと思ったら、今年の3月に我が家でルカを受入れた際にロフトベットを使ったので、ロフトベッドに憧れて変更したと言っていました。

ホームステイ先では、分からなかった時に姉に聞き助けてもらうことや単語を調べることができないので、初めは少し焦りました。しかし、ホストファミリーの家はもちろん、飲食店などでもWi-Fiが使えたので、分からなかった単語や文法を調べることが出来ました。日本でも、色々な所でWi-Fiが使えるようになればいいなと思いました。

また、自分のボキャブラリーが少ないことにも気づきましたが、生活していく中で使う文法が限られていることに気付き、徐々に慣れていきました。

ボッパルト市は、青梅と同じで山はありますが、山全体が低く高い建物が少ないので、高い建物の上からはボッパルト全体や遠くの山並みが見えてとても綺麗でした。

私はボッパルト行って、日本の文化のいいところがたくさん見えた気がします。日本の住宅環境を考慮し、高さを有効活用したロフトベットやアニメです。ホストファミリーのルカとは、共通点が少なかったですが、日本のテレビアニメの「暗殺教室」をドイツ語字幕と一緒に観ました。2～3時間くらい笑いながら一緒に見ていました。日本のアニメを馬鹿にしちゃいけないなと思いました。

青少年友好親善使節団としてボッパルトに行った経験は、私を大きく変える経験になりました。今までより

英語が好きになったし、もっと、英語を学びたい、話したいと思いました。この年齢でボッパルトに行けて、本当に良かったと思いました。

これからも青梅市とボッパルト市の交流が続くように、たくさんの人にこの経験を伝えたいと思います。ボッパルトとの交流が51年間続いていて良かったです。

最後に、この派遣に携わったすべての人に感謝いたします。

本当にありがとうございました。



「異文化」に触れる

青梅市立第七中学校3年
手塚 光希

私は今回、「ホームステイで受け入れた皆さんともう一度会いたい」「日本と違う価値観を体験したい」という思いから、第16回青梅市青少年友好親善使節団の派遣に応募しました。

派遣団員に選ばれたときは、とにかく嬉しかったです。最初は「嬉しい」という感情でいっぱいだったのですが、出発間際になって、言葉は通じるだろうか？他の団員や、ポッパルトの皆さんと楽しく過ごせるだろうか？などと、気が付けば期待感より不安の方が大きくなっていました。

しかし、実際、ポッパルトに到着してみると、そんな心配は全く吹き飛んでしまいました。

「ポッパルトの皆さんは、なんて優しいんだ・・・」これが、私が訪問中の九日間、常に強く感じていたことでした。会話をしている間、文法も発音も今ひとつな私の英語を、嫌な顔一つせず、何とか理解しようと耳を傾けてくれました。想いが伝わった時の嬉しさは、何とも言えないものでした。

また、皆さんとても気さくで、冗談を言って笑わせてくれたり、とても乗りがよくて、初対面とは思えないくらいフレンドリーに接してくれました。人と人の距離感が、日本人とは違うなと感じました。

ポッパルトに行って感じた日本とドイツの文化の違いは、人間同士の関係だけではありません。

特に違うなと思ったのは、建造物です。ライン川沿いの至る所に古い石造りの城が立っています。このことは訪れる前から知識としては知っていましたが、実際に行くと、自分が思っていたより遥かに多く、「右を見ても左を見ても城」という景色が何度もあって、外国にいるんだなあとそのたびに感じました。

また、ポッパルトは街並みも綺麗でした。日本では歴史資料として保存されていそうな古い年代の建物が街中に普通にあって、現在もお店や宿として使われていることに驚きました。使い方も、古い部分を上手に活かすように手を入れていて、日本よりドイツの街並みの雰囲気の方が素敵と感じてしまいました。

私は、日本と違うところを探そうと意気込んでいましたが、日本と変わらないことも見つけてしまいました。私はアニメーションが好きなのですが、ホームステイ先の高校生のファルコ君が、なんと日本のアニメーションの大ファンで、逆に僕が知らない日本のアニメーションを教えてくださいました。お互いに、自分の好きなアニメーションを紹介したり、一緒に見たり、言葉の不自由さな

んか忘れて、何時間もアニメーションの話で盛り上がったりもしました。国や言葉が違って、共通の話題があれば楽しい気持ちや時間を共有できるんだと初めて実感しました。「嬉しい」とか「楽しい」とか、人の心は、どこに住んでいても同じなのかもしれない、そんな風に思いました。

こんなに中身が濃い十日間は生まれて初めてでした。そして、この旅の間と準備の間、私は実に多くの方たちと関わりました。私にこんなすごい経験をさせてくれた、青梅市とポッパルト市の関係者の皆さんと、ホームステイ先の家族、団員のみんなに感謝したいです。Danke schön!



小さい世界から大きい世界へ踏み出す

青梅市立吹上中学校3年

田中 礼美

私は今回、ドイツ・ポッパルトに派遣され一番強く感じたことは、「日本や今まで暮らしていた環境はとても小さく、世界はとても大きい」ということです。

今まで私は、外国人と一対一で関わるということをしたことがありませんでした。今までの海外旅行はもちろん家族と一緒にでした。しかし、今回は家族もおらず、さらにホームステイということで、初めは不安でいっぱいでした。そんな中で、未知のポッパルトでのホームステイが始まりました。

ポッパルトに行くと、習慣や文化、宗教などの違いにとっても驚かされました。一番の違いは言語でした。ポッパルトではドイツ語が使われていて、事前研修で多少習ったものの、まったく聞いても理解できず、初日はホストファミリーの輪の中になかなか入れませんでした。しかしファミリーが時々、英語で話しかけてくれて、話すきっかけを作ってくれました。一度ファミリーと話すと、真剣に聞いてくれているということが分かり、どこか緊張がほぐれました。自分が話すことで、より自分を知ってもらえる。そして親しくなれるのではないかと思い、そこから毎日自分から話しかけることができるようになりました。そうするとファミリーからもたくさん話しかけてもらえるようになり、すぐに打ち解けられました。

このように、言語の壁というものには気持ちの問題で、少しの勇気で一瞬にして越えられるものだと実感しました。

また、ポッパルトでは多くの人と関わりました。そして、その人たちは皆、それぞれ違う個性を持っていました。その中で、今まで出会ったことのない個性を持つ人も多くいました。そのような個性を知ることで、まだまだ多くの人がある、ということを再確認できました。それにより、いろいろな人達への理解が深まり、「この人はこういう人なんだ」と偏見を持たず受け入れられることが多くなりました。

この派遣を通じ、いろんなことを知り、感じ、考えることができました。それにより、視野が大きく広がりました。

今までの私の考え方は「今暮らしている青梅や日本が全て」で、世界史や外国のニュースにはあまり関心がありませんでした。しかし、今回の派遣で世界はまだまだ知らないことだらけで、今まで知っていた知識や自分の考え方がどれだけ小さく、狭いものだったのだろうと痛感し、「日本は小さく、世界はまだまだ大きい」と感じることができました。

これからは、この派遣での経験を多くの人に広め、

自分と同じように感じて欲しいと思いました。そうすることで、自分の「世界」を広くすることができ、広い視野で素敵な考えや有意義な生活が築けると思います。そして自分の自信にもつながるはずです。

そして、このような経験ができたのは、たくさんの方々が支援してくださったおかげです。大変ありがとうございました！

Danke schön!!



つながりを大切に ～派遣を通して～

青梅市立新町中学校3年
長塚 万依

今回私は、青少年友好親善使節団の一員として夢のような十日間を過ごし、素晴らしい体験をたくさんさせて頂きました。

私が青少年友好親善使節団に応募したきっかけは、二つあります。

一つは、姉が派遣団員としてボツパルトに行ったこと、もう一つは、ホストファミリーとして、ボツパルトの高校生を受け入れたことです。これらのことから私は、国際交流や国際理解について身近なこととして考えるようになりました。派遣後の姉の様子を見ていても、人と人はどんどんつながっていきけるのだなと思えました。

しかし、実際に日本を離れて文化や考え方の違う人々とつながっていくことは、私にとって勇気がとても必要なことでした。初めは、目にするものすべてが日本と違い、それらに圧倒され、何をしたらよいのか分かりませんでした。今までの私は、誰かに頼ってばかりでした。しかし今回は、一人でのホームステイということで、自分から行動しなければなりません。

私は、二つの家庭にお世話になりました。初めの家庭は、姉がホームステイをし、更に我家にホームステイをした子の家庭でした。初めから家族のように接してくれました。元々予定があったにもかかわらず、ぎりぎりまで私を受け入れてくれたこと、つながりを大切にしてくれたことに嬉しくなりました。

次の家庭は、十七歳の女の子がいる家庭でした。一人っ子だったので、私を妹のようにかわいがってくれました。二人でボツパルトの市内を散歩したり、スーパーに行ってお買い物をしたりしました。日本に帰国するとすぐに、「無事に着いた？」とメールをくれました。これからはつながっていきけると思うと嬉しくなりました。

ドイツに行くまでは、国際交流というと、すごいこと、自分には関係ないこと、無理なことなどと考えていましたが、少しでも勇気を持って自分から近づいていくことで家族のようになれることを実感しました。

「おみやげは柿の種とカップラーメンとインスタントの味噌汁がいいな。」と気軽に言ってくれたり、「ドイツのお菓子が安く売っているスーパーに行きたい。」と言ったりできるような関係、そんな温かい関係をこれからも大切していきたいです。

そういった小さな積み重ねを広げていくことが、大きいかもしれませんが、世界の平和につながっていくのかもしれませんが、

青梅市は、東京オリンピック・パラリンピックのドイツ

のホストタウンとなりました。四年後の私は十八歳です。それまでにどんなふうにつながっていけるのか、そして、私にどんなことができるのかを考えると今からワクワクします。

いろいろな方々のご協力があって、今回私は貴重な体験をさせて頂くことができました。

感謝の気持ちを忘れず、これからも「つながり」を大切にしていきたいです。

本当にありがとうございました。



『Danke！！』

青梅市立泉中学校3年
橋本 雅奈

中学生最後の夏、青少年友好親善使節団で忘れることの出来ないたくさんの経験をさせていただきました。

ポッパルトは、ライン川沿いに可愛らしい建物や歴史のある建物がたくさん並んでいて、絵本の中の世界のようなとても綺麗な街です。

私は、実際にポッパルトへ行ってみて感じたことが二つあります。

一つ目は、文化の違いです。ポッパルトの方々は友達のようにフレンドリーでした。目が合うとニコっとしてくれたり、通りすがりにハイタッチをしてくれたりとても温かかったです。

そのような光景は日本ではあまり馴染みがなくて少し戸惑ったけれど、ポッパルトの方々の優しさを肌で感じることができて嬉しかったです。

他にも、食文化について詳しく知ることができたのではないかと思います。日本でいう日本食のように、ドイツならではの料理が食べられることを行く前から楽しみにしていました。しかし、いざドイツ料理を食べてみると、サラダの量とお肉のボリュームに圧倒されてしまいましたが、とても美味しかったです。文化の違いはたくさんあるけれど、それを知ることができて良かったです。

二つ目は、コミュニケーションの大切さです。その中でも、自分から積極的にコミュニケーションをとることが特に大切だと思いました。初めは、英語が上手く伝わらないことが多くて不安でした。しかし、粘り強くどうしたら上手く伝えられるかを考えて単語を繋いだり、手の表現を付け加えたりすることで伝えることができました。上手く言えなくても頑張れば伝わると、私はその時そう思いました。正直、日本では「私は人見知りだから～」と逃げてしまうことが多かったと思います。しかし、言わないと伝わらない、試してみなければわからないということを改めて実感しました。

また、SNSなどのツールも一つの交流の方法として有効だと思います。スマートフォンのアプリがきっかけで、話をする事が出来たこともありました。アプリのおかげで気軽に連絡をとることもできるので、今後もコミュニケーションのツールとして取り入れていきたいです。ドイツで過ごした9日間は、初めて体験することばかりの楽しくて濃密な時間になりました。

初めは緊張してあまり話していなかった団員同士も、事後研修では写真を見せ合い一緒に思い出を振り返ったりするなど、すっかり仲良くなりました。私は受験生として進路を決めなければいけない年でもあり、視野を

広げたいと思ってこの派遣に応募しました。志望動機の通り、新たな視点からの新たな目標を見つけることができました。私はその目標を達成するために頑張っています。

この派遣に応募したこと。このメンバーに選ばれたこと。このメンバーでポッパルトへ行けたこと。本当に挑戦してみて良かったです。

今回の経験を活かして、今後も受け入れやイベントなどの交流事業に協力出来たらいいと思います。

そして、ポッパルトの方々が青梅に来られた際は、最高の「おもてなし」でお迎えしたいです。

最後に、団員と今回の派遣に携わったすべての方々に感謝致します。

ありがとうございました。



ボッパルトを訪れて

青梅市立霞台中学校2年
旭 りか

8泊10日、長いようでとても短かったです。お城を見て、山登りをして、パーティをして。

短い中でもとても印象に残る毎日でした。

その中でも、特に印象に残っていることは三つあります。

まず一つ目は、一日目の出来事です。ボッパルト市に着き、ホストファミリーのマレット達に部屋まで案内してもらった私は、すぐにベッドに座り込みました。その日は雨が酷くとても寒かったので、布団にくるまりながらお母さんにボッパルトに無事に着いたことを報告しました。正直に言えば、ホストファミリー宅に着いて日本語が聞こえてこないという状況はとても怖かったです。

夕食中も、ホストファミリーの話にただ反応をする、ただそれだけでした。何かしゃべらなくちゃ。そう焦りながら食器を片付けようとする、お母さんが「大丈夫よ。そこに置いていて。ありがとう。」と英語で言ってくれました。その優しい言葉にハッと、私は「ダンケシューン。」震える声でそう言いました。私が初めてドイツ人とドイツ語でしゃべった言葉です。

二つ目は、パーティの夜です。大分慣れてきたものの、やっぱりまだ不安でした。ですが、ボッパルトの方々も一緒にソーラン節を踊ってくれたり、話しかけてくれたりしたので、その日はとても楽しい一日となりました。連絡先も聞いて、今でもボッパルトの方々と連絡をとっています。

最後に三つ目です。三つ目はフリータイムについてです。フリータイムは二回ありました。一回目のフリータイムは山を5キロ登るつもりが、お父さんが道を間違えてしまい10キロも登りました。とっても疲れたけれど、マレットと「疲れたね〜。もう少し頑張ろう！」としゃべれたので、私はとても楽しかったです。

二回目のフリータイムは、手塚光希君とそのホストファミリー、中野正太君とそのホストファミリー、そして私とエヴァでプールに行きました。とても大きいプールでした。一メートル、三メートル、十メートルの飛び込み台があって、みんなで三メートルの所から飛び込むことになりました。いざ、台に立ってみると思ったより高く、一度もやったことがないので心臓がドキドキでした。思い切って飛び込んでみると、たった一瞬で深いプールに落ちました。楽しかったけれど飛び込むのは当分いやと思いました。

その他にも、プールでルカに投げ飛ばされたり、みんなでfrisbeeをしたりと、とても楽しかったです。

ボッパルト市に行って、日本とは違った街並み、日本とは違う食生活、普段とは全く違う生活をしました。最初は不安だったけれど、ドイツ人の友達ができたりして行くうちに、帰りたくないと思うようになりました。

将来絶対にまたボッパルトに行く。そう思いながら、今日も私はドイツのお友達に手紙を書きます。



自分が変わった10日間

青梅市立新町中学校2年
高橋 日菜子

私は、ボッパルト市への青少年友好親善使節団員として、10日間とても充実した時間を過ごすことが出来ました。

私は、ドイツに行く前には不安がありました。

それは、しっかり相手に自分が言いたいことが伝わるのかということです。私は英語が苦手で、知っている単語を繋ぎ合わせたり、身振り手振りで自分の言いたいことを伝えようとすると、相手も真剣にわかってくれようとしてくれるので、必死に伝えました。わかってくれたときは凄く嬉しくて、でも、もっと勉強してたくさん会話したかったなという後悔もできました。

ドイツに来た事を実感し始めたのは、フランクフルト空港からボッパルト市へ向かうバスから見える景色です。

たくさんのお城や、ヨーロッパならではの可愛らしい建物があり、この10日間どんなふうになるだろうと、とてもワクワクした気持ちになりました。

今回泊まらせてもらったローズ家は、ボッパルトに着いた時から明るく話しかけてくれ、少し不安だった私の心を和らげてくれました。

ローズ家とは、一緒にスーパー行ったり、遊園地に行ったり、バーベキューしたり、と、たくさんの思い出を作ることができました！

特に印象に残っていることは、バーベキューの後に、ティムくん、ニキくんと一緒に見た、日本ではおなじみの「8時だよ 全員集合」です。

日本では20年くらい前にテレビで放送していたのですが、私は見た事のないバラエティーだったので、3人で爆笑しながら見ていました。

ボッパルト市と友好協会の方々が開いてくださったパーティでは私達はドイツ語で

「イッヒ ハイセ ヒナコ」

「イッヒ ビン ミッテルシューラー」

「イッヒ ビンドライツェン」

「マイン ホビー イスト バスケットボール」

とドイツ語で自己紹介しました。日本語で

「私の名前はひなこです。」

「中学生です。」

「13歳です。」

「趣味はバスケットボールです。」という意味です。

その後、ボッパルトの方と一緒に手をつないでジャンプして踊り、私達団員とボッパルトの方々の距離が一気に縮まった気がしました。

このドイツ・ボッパルトで過ごした9日間という、長いようで短い今回の体験は、私にとって一生の思い出、宝物になりました。

私は、英語をしっかりと話すことができず、他の団員に頼ってしまったりしたので、次に行く時は、自分で積極的にコミュニケーションをとれるようにして行きたいです。

今回、貴重な体験をさせていただき、本当にありがとうございました。

私は、また必ずボッパルトへ行きます！



企画部秘書広報課長
星野 由援

Wasser bitte (ワッサー ビッテ)。

ドイツのレストランで「水をください」と注文すると、だいたい炭酸ガス入りの水が出てきます。私にとって炭酸ガス入りの水はあまりなじみがないのですが、それを煩わしいと思うか、異文化として受け入れるか、ちょっとした気持ちの持ちようで世界観が変わると思います。

国際交流は、その国に住む人のことを理解するとともに、こちらの主張もしっかりして意思疎通することが大切です。炭酸ガス入りの水を注文してみることは、自分の嗜好とはちょっと異なる分野へのささやかな挑戦です。しかし、そうしたわずかな一歩を踏み出す勇気を持つことが、自分の世界を広げてくれるのだと思います。

2016年の夏、10人の青少年が、人生の中でも忘れられないような体験の扉を、勇気を持って叩きました。

今回の青少年友好親善使節団は、全員を公募にしたとともに、20才まで年齢層を引き上げました。

当初、中学生から大学生までという全く異なる環境で生活している世代が、はたして同じ集団の中でコミュニケーションをとり、チームとしてまとまることのできるのか心配な部分がありました。

しかし、それは杞憂であり、10人の仲間は瞬間に常に笑いが絶えない、そしてお互いを尊重しあう素晴らしいチームとなりました。そこには中学生、高校生、大学生といった世代の壁はなく、いつの間にかお互いをファーストネームで呼び合うほどの、青梅弁で言うところの「のめっこい」仲になりました。

今回の団員が一人でも違っていたらこのような素晴らしいチームワークは発揮できなかったわけであり、このメンバーでボッパルト市を訪問できたことに心から感謝しています。

ボッパルト市で過ごした9日間、ホストファミリーをはじめとする多くのボッパルト市民の優しさとおもてなしの心に包まれて、団員は皆、真剣に外国語で会話し、真剣にドイツの生活を体験し、真剣に日本文化を紹介し、真剣に遊び、そして言葉では語りつくせないほどの多くのことを吸収し、本当に充実した日々を過ごすことができました。

ボッパルト市での日々は、到着した瞬間からその一瞬一瞬のすべてが素晴らしい思い出になり、全団員の心に深く刻まれました。

今回もボッパルトマジックにかかり、多くのボッパルトファンが生まれました。

この感動と感謝を忘れることなく、ホストファミリーや

ボッパルト市で友人になった方とは、SNSや手紙などで連絡を取り合い末永く交流を継続してもらいたいと思います。

「国際交流」というと兎角難しく考えがちですが、今できることを一つずつ積み重ねることが大切だと思います。

今回、このような素晴らしい体験ができたのも、50年にわたり両市の交流に御尽力いただいた多くの先達のおかげであり、連綿と続く青梅市とボッパルト市の姉妹都市交流の歴史の一端に自らの身を置かせていただけたことを心から幸せに思っています。

今回の派遣に当たり、ボッパルト市職員、友好協会をはじめとするボッパルト市民の皆様、そして2016年の夏のひと時をボッパルトで共に過ごした10人の青少年の仲間たちに心から感謝します。



(2) テーマ学習

「青梅とボツパルトのごみ処理の違い」

今回の派遣団員は、事前研修で青梅市のごみ処理について清掃リサイクル課に研修をしていただき、派遣中にはキルシュベルクにあるごみ処理場の見学や、民泊家庭でごみ分別について質問し、日本とドイツのごみ分別について学んできました。

ドイツは、ゴミの処理に優れた国というのをよく耳にします。

私が今回の訪問を通して目にしたのですが、確かに、限りある資源を大切にしているということです。例えば、日本でもスーパーなどでレジ袋を有料化していますが、ドイツでの有料化は本当に金額も高く、また、みんなエコバックを持っていくなど意識が高いということに気がつきました。

そして、ペットボトルには専用の回収ボックスがあり、そこへ持っていくと買った時に上乗せされたデポジット料金代約30円分が戻ってくる仕組みになっています。

こういった細かい取り組みからも、ドイツ人がいかに工夫して環境を守り、ポイ捨てをさせない社会をつくっているということが伺えます。

また、家庭のゴミを出す際も袋を使わずに、何回も使うことのできる大きなコンテナが一つの家庭に3つ程あります。これは、燃えるゴミ、プラスチックゴミ、その他のゴミで分けられているそうです。それ以外の大型家電などの廃棄物は、直接ゴミ処理場に持っていきます。仕組みは青梅市のリサイクルセンターとよく似ています。

また、そのゴミ処理場では、埋め立てているゴミを減らすために、土に埋めるまでに使えるところは使うといういくつかの過程を経て、最終的に、何も使えない部分のみを埋め立てるというゴミを最小限にするという取り組みにも、資源を大切にすることが感じられました。

日本でも環境保護についていろんな工夫がされていますが、今回の派遣でドイツでは日本と違ったところに目をつけて同じように工夫しているということが分かりました。ドイツでは無駄なものを作らない、増やさないという合理主義的考えで、さすがと思わされる部分が多々ありました。

私もこれを機に、無駄なものを使わない、増やさない、買わないという意識を持ち、なるべくレジ袋をもらわないようにし、また、ペットボトルの分別など細かい取り組みもしていこうと考えました。

ここで学んだことを周りの人、家族に伝えていくことで、身近なところから広まり、皆が環境問題を意識していくことを願っています。



ドイツは世界でも、環境保護の先進国として注目されています。

ボッパルトはとてもきれいな街で、自然を大切にする工夫がされていました。

まず、ボッパルトでのごみの分別は、大きく分けると、紙、生ゴミ、プラスチック、その他に分別します。これは、青梅のごみ分別とさほど違いが無いように感じました。

ですが、出し方に違いがあります。それは、ゴミをバケツに入れ、ゴミ収集車はそのバケツの中のゴミだけを回収するのです。

これは、袋で出す青梅市と違いバケツは繰り返し何度も使えるので、このようなところにも、ドイツの人たちの資源を大切にすることが表れていると思いました。

街中にはゴミ箱がたくさんあり、ポイ捨てされているゴミが全く見当たらず、ボッパルトの人たちは、町の景観を当たり前のように守っています。

青梅でもポイ捨てはあまり見られませんが、ペットボトルが道路脇の茂みの中に捨てられている光景は目にしたことがあると思います。ドイツでは、ペットボトルはスーパーにある専用のリサイクルボックスの中に入れ、そうすると飲み物を買ったときに含まれている容器代が返ってきます。このような取り組みは、ぜひ日本でも実施すればポイ捨てを減らすことができるのではないかと思います。

つぎに、スーパーで買い物するときレジ袋は有料であり、買い物する人はエコバックをもって行きます。

私もホストファミリーとスーパーに行ったときは、もちろんホストファミリーも他の買い物している人もエコバックなどを持っていて、誰もレジ袋をもらっていませんでした。日本でも、スーパーでレジ袋を有料にしてエコバックを使うことを推奨していますが、まだ当たり前のようにスーパーやコンビニで毎日大量のレジ袋が使われています。また、そのほとんどのレジ袋はすぐに捨てられてしまいます。

帰国後私は、この問題を改めて考え、レジ袋をあまりつかわず、ボッパルトの人たちのようにエコバックを持ち歩くようにしました。

見学に行ったキルシュベルクのゴミ処理場見学では、ポイ捨てされたゴミは何年たっても土に還らず、生態系の豊かさに悪影響を与えることを学びました。

環境を大切にすることは、自然と生きていく中で当たり前であり、決して難しいことではないと思います。自分のことだけを考え、ポイ捨てをしたり、ゴミの分別をしなかったり、このちょっとしたことが重なっていくと、今ある豊かな環境がなくなってしまうのではないかと思います。

今回ドイツへ行ったことで、改めて環境への意識を自分の目で見て、感じることができました。

ボッパルトのように、一人ひとりが環境を大切に、できるだけゴミを出さないことを意識し、美しい青梅や日本がこれからも保てるよう行動したいと思います。

循環させよう！

明星高等学校2年
村木 愛

青梅市のごみは最終的にどうなっているか知っていますか？埋め立てているんでしょう？と思っている人も多いと思いますが、実は違います。私は、事前研修のとき、市役所の清掃リサイクル課の方に教えていただき初めて知りましたが、燃やすごみ処理は最終的に、焼却灰エコセメント化施設でエコセメントになります。そのエコセメントは、道路の側溝やインターロッキングブロックなどに使われています。埋め立てをせずに、エコセメントとして利用する発想が凄いなと思いました。

一方ポッパルトはというと、ごみ処理場のすぐ入り口に、8万トンのごみが埋められている山がありました。なので環境には配慮してないのかな？と思ったら、日本とは違うエコなところが三つありました。

一つ目は、ごみの出し方です。日本では、専用のビニール袋に入れて出しますが、ポッパルトでは大きなごみ箱ごと外に置き、中身だけ回収していました。ごみ箱は何度も使えるので、ビニールのごみ袋を使わない分エコだなと思いました。

二つ目は電化製品です。電化製品は、処理費を製造会社が負担する制度となっていました。製造会社が引き取ることによって、使える部分は再利用できる場所がいいなと思いました。また、ペットボトルも、お店にもっていけばお金が返ってくる仕組みでした。これなら多くの人がペットボトルをお店に持っていき、リサイクルできていいなと思いました。

三つ目は、スーパーではレジ袋をくれないことです。買い物する人は全員エコバッグを持っていました。日本でも最近はレジ袋をくれないお店が多くなっていますが、持っていないときはレジ袋を買うことができます。しかしポッパルトでは、レジ袋は売ってなく、エコバッグが売られていました。レジ袋を使わない精神がエコで素晴らしいなと思いました。私はコンビニに行くといつでもレジ袋をもらってしまっているのですが、これからはエコバッグを持ち歩くようにしようと思いました。

また、ごみ処理場では森の中は循環しているということ、昆虫を見て、触って学びました。

ごみも同じように循環していくことが大事だと思います。



ごみとリサイクル

東海大学菅生高等学校1年
中野 正太

環境先進国と言われているドイツのポッパルトに行き、青梅との様々なごみ処理やリサイクルの違いに気づきました。

ごみの分別についてポッパルトでは、生ごみ、紙、プラスチック、その他に分けられます。この4種類のごみを各家庭でバケツに集め、収集時にごみだけを回収します。

青梅のごみ袋とは違い、バケツは繰り返し使用できます。袋を使用しない工夫がされていました。袋を使用しない工夫は、スーパーマーケットでも行われていました。ホストファミリーはもちろん、ポッパルトの方々は、皆エコバッグを持って買い物をしていました。

自分もドイツでは、意識してエコバッグを持って買い物に行っていましたが、慣れていないため、エコバックを持つのを忘れてしまうこともありました。また、派遣団員の中には、買い物の際にエコバックを持っていたのにドイツ語がわからず「YES」と言ってしまう、10セント(日本円で10円)くらい払い、レジ袋を買ってしまった団員もいました。日本でも一部のスーパーマーケットはレジ袋の有料化が行われていないので、全てのスーパーマーケットのレジ袋が有料化されれば、より意識が変わるのではないかなと思いました。

ペットボトルにも工夫がされていました。日本とは少し違った制度でした。ペットボトルをスーパーマーケットに持って行くと、25セントに換金できます。ペットボトルには、傷がついていて最初はビックリしました。

ドイツでは、ペットボトルも日本のビンのように繰り返し使用していました。ドイツでは水道水を飲まないの、ペットボトルやビンの水をたくさん使用する国の良い工夫だと思いました。

今回の派遣で、環境先進国ドイツのごみ削減の工夫を学ぶことが出来ました。日本は、見習うべき点がたくさんあるなと思いました。

一人ひとりがごみ問題に意識を持てば、より良い世界になるなと思いました。



ドイツで学んだ、今から身近にできること

青梅市立第七中学校3年
手塚 光希

環境先進国と言われるドイツでは、色々なところで環境への配慮が感じられました。例えばドイツには、ペットボトルの換金制度や過剰包装への罰金などの、ゴミを増やさないための制度が整えられています。このような、行政による法やシステムの整備は、日本よりはるかに進んでいるように感じました。しかし、私がそのことよりも驚いたのは、住む人々個人の環境に対する意識の高さです。

その一つが、清潔さです。ボッパルトには9日間滞在していましたが、その中で一度もポイ捨てされているゴミを見かけませんでした。日本では、施設内でゴミが落ちているようなことはあまりありませんが、屋外には至る所にゴミが落ちています。ドイツでこのようなことがないのは、一人ひとりの住む場所を綺麗にする、という意識が高いからだと思いました。日本でも、ゴミ拾いなどの活動で環境を綺麗にしていこうと考えている人がたくさんいます。しかしそれはつまり、日本はまだゴミ拾いをしなければいけない環境である、ということです。「ゴミ拾いが要らない」という環境に驚くと同時に、日本もいつかはそうなって欲しいと思いました。

また、スーパーマーケットでは、使われている「袋」が少なかったです。レジ袋は有料で、肉や野菜の包装はほとんどありませんでした。日本でもレジ袋を1円か2円にしているところがありますが、ドイツほど普及はしていませんし、レジ袋を使うのが普通で、エコバックなどを使うのはたまにという感覚があります。しかし、ホームステイ先の方と買い物に行った時は、客が皆、当たり前のように自分のバックを用意していました。レジ袋が有料という制度も新鮮でしたが、それより自分の袋を使うのが常識化しているのが衝撃でした。

ドイツには、今日からでも自分で身近にできる環境への取り組みがたくさんあることを知りました。

このような活動が、日本にもどんどん広まって欲しいと思います。



ポイ捨て No!

青梅市立吹上中学校3年
田中 礼美

私は、今までポイ捨てはいけないことだと頭では理解していました。しかし、本当に生活の中で考えていたかという、考えていなかったと思います。今回ドイツのゴミ処理場を見学して、改めてポイ捨てはいけないことだと思いました。

ゴミ処理場には、いろいろなものが展示されていました。まず始めに衝撃を受けたのが、ポイ捨てされたゴミや放置されたゴミによって、傷つき、怪我を負ってしまった野生動物の写真です。この写真を見たとき、これが現実にあるものなのかと目を疑いました。しかし、これは本当にあったことだと聞き、とてもショックを受けました。自分がポイ捨てをすることで、このように動物を傷つけてしまっているのだと思うと反省の気持ちになりました。

次に、ポイ捨てされたゴミがどのくらいの時間をかけて土に還るのかという展示を見ました。私たちのとても身近にあるペットボトルや空き缶、たばこの吸い殻など、たくさんの種類のものがありましたが、ほとんど土に還っておらず驚きました。どれだけポイ捨てが自然環境に悪影響を与えられているかを見て取れました。その中でも驚いたのが、テトラパックです。一見紙が使われていて土に還りそうなのですが、その周りにはビニールでコーティングされていて全く形を変えることなく残っていました。それは何年経っても土に還ることはないのだそうです。

このように、ポイ捨てをすると街が汚れるだけでなく、野生動物や環境にも悪影響が及びます。これは、自分が一つのゴミをどう処理するかによって大きく変わってくるのではないのでしょうか。「めんどくさい」という安易な気持ちでポイ捨てをしてはいけません。だから、日本もドイツのようにゴミを減らす工夫をしたり、ゴミ箱を多く設置したりという、ポイ捨てが当たり前ではなくなるような環境を作るべきだと思います。

これからは、ゴミが出てもゴミ箱に捨てたり、家に持ち帰ったりすることを当たり前にし、街のポイ捨てを少しでも減らしたいです。



ごみに対する意識

青梅市立新町中学校3年
長塚 万依

ドイツも日本も自然や環境を大切にしている国とされていますが、ごみの分別やリサイクルについての意識は、ドイツの方が高いのかもしれませんが。今回、事前学習やキルシュベルクごみ処理場の見学、ホームステイ先での生活を通して私はそう感じました。

ドイツのごみ処理場では、実験の結果を見ました。ペットボトル、たばこ、また、紙パックでさえもすぐに土に還ることはありません。どこの国もそうだとは思いますが、そういったごみを処理するには多くのお金がかかります。きっと何気なくごみを捨ててしまう人の多くには知られていない現実だと思います。今回私は、このような現実を実際に目にすることができてよかったです。自分の生活を見直すきっかけになったからです。

一人ひとりの意識の持ち方で、ごみの量は変わるはずですが、まずは、ごみに関する現実や課題を知ることから始めないといけないかもしれません。

私の家庭では、エコバックを持参してポイントを集めたり、アルミ缶をリサイクルし一円が戻ってくるというシステムを利用したりしています。ポツパルト市で私がお世話になった家庭でも、ペットボトルをリサイクルに出すのが当たり前でした。

自分達が住んでいる青梅のごみの分別やリサイクルについても、改めて見直し、自信をもって青梅を訪れた人々に伝えられるようにしていかなければならないし、一人ひとりが高い意識をもって豊かな青梅の自然環境を守って生活しなければいけないと痛感しました。



環境に対する意識

青梅市立泉中学校3年
橋本 雅奈

リサイクルなどにとっても力を入れているドイツは、環境先進国としてよく知られています。

そして、その環境やゴミに対する意識の高さを感じる事が何度もありました。

まず、リサイクルです。特に私が凄いなと思ったのは、ペットボトルのリサイクルについてです。「デポジット」というスーパーなどに設置されている機械にペットボトルを入れると、元の代金に含まれていた容器代として25セントが返ってきます。私は、ホストシスターに「ペットボトルは捨てちゃだめだよ！」と言われたのでその理由に納得できました。

しかし、自分の目でこの機械を見ることが出来なかったのも少し悲しいなと思っていたら、学校の教科書の環境のところ「ドイツ デポジット」という文と共に紹介されているを見つけました。多くの人が利用しているそうなので、次ドイツに行ける機会があれば私も是非ペットボトルを入れてみたいです。

次に、徹底されたゴミの分別についてです。ポツパルト市ではゴミを、紙ゴミ、生ゴミ、プラスチックゴミ、その他のゴミの4つに各家庭で分別します。青梅市でも同じように分別されますが、各家庭のゴミの出し方に大きな違いがありました。青梅市は指定の色違いの有料ゴミ袋に決められたものを入れて出します。一方、ポツパルト市は、各家庭にあるボックスにゴミを入れてボックスの中身だけを回収します。袋とは違い何度でも使えるので、袋が無駄にならず環境に優しいなと思いました。

また、分別だけでなく、ゴミ削減の一つとしてエコバッグを持つことがあたりまえでした。日本でもレジ袋が有料なお店もありエコバッグを持つ人が増えましたが、コンビニなどではまだたくさんのレジ袋が消費され、そのまま捨てられてしまいます。

ドイツで一番感じたことは、「街にゴミが落ちていない。とてもきれい。」です。それが保たれているのは、一人ひとりが街をきれいにしようと思う意識があるからだだと思います。

ドイツで学んだリサイクルなどを青梅市で活かし、環境について自分は何ができるかと日々考え、家族や地域の人と協力し合い「青梅も自然が豊かでゴミが落ちてない。とてもきれいな街。」と言われるようにしたいです。



青梅ではゴミを収集する日は、週に何回かありますが、ボップルトでは月に何回かしかゴミを収集しません。私はそれを聞いた時、臭くならないのかと、とても驚きました。

実際、生ゴミがたまに酷いことになっていると言っていました。だったら青梅の方がいいじゃないかと思いましたが、ボップルトにも真似したいゴミの収集方法があったのです。

ペットボトル。青梅では、洗ってペットボトルのキャップと別にして収集場所に出していますが、ドイツでは飲み終わった空のペットボトルをお店に返却すると、少しお金が戻ってきます。つまり、ペットボトルをゴミ箱に捨てるのはもったいないということです。

更に、ボップルトの街にはゴミ箱が設置されています。ゴミ箱のゴミがあふれることもなく、とても綺麗でした。ポイ捨ても見ませんでした。

ボップルトの方々は、ゴミのルールをきちんと守っていて、自分たちの街を大切に思っていることがとても伝わってきました。

青梅とボップルトのゴミについての共通点とはなんでしょう。私はゴミ問題への意識の高さだと思っています。ゴミをポイ捨てする人は、ボップルトにも青梅にもほとんどいません。ボップルトでは、レジ袋は基本もらわないし、青梅でもエコバックを使っている人が増えてきています。どちらの市もゴミを減らすため、増やさないために頑張っています。自分達が住む町、国を好きだからこそ、綺麗にできるんだと感じさせられました。

私が青梅に真似して欲しいと思ったことがあります。それは、先ほども書いたペットボトルの回収方法です。残念ながら青梅ではお金が返ってくるということはありません。ですが、それを行ったら、ペットボトルをちゃんとキャップとボトルに分けてくれる人がもっと増えると思うのです。それによって、ゴミについて深く考える人がもっと増えてくれるかもしれません。

逆に、ボップルトにぜひ真似して欲しい所は、ゴミの収集頻度をもう少し増やすということです。生ごみが酷いことになってしまうと、匂いも大変だし虫も寄ってきてしまいます。そうなってしまう前に収集した方が良く私は思いました。

ボップルト市に行って、ゴミが全く街に無く、とても綺麗なことを知りました。みんなのゴミに対する意識が高いからこそ綺麗なんだということ私には学びました。

青梅市もボップルト市も、これからも同じ地球を綺麗にして行くために頑張っていきます。



私はボップルトに行き、ドイツの人々は資源を大切にしているんだと感じました。

ドイツは、環境「先進国」とも言われている国です。私は、この環境先進国ドイツで驚いたことが二つあります。

まず、ゴミはバケツのようなものに入れて出します。袋でゴミを出す日本と違ってバケツは繰り返し何度でも使えます。このような所からも、みんなが環境問題について考えているのだとビックリしました。

二つ目は、街を歩いているとゴミ箱が沢山あり、それにポイ捨てが全く見当たりませんでした。

日本もゴミ箱は設置してありますが、ポイ捨てが全く無いところなどあまりありません。なので、私はドイツの人たちは本当に一つひとつ環境について考えているんだと改めて感じました。

また、キルシュベルクのゴミ処理場では、土にゴミを埋めて、それが何年したら土に還るかという実験を見学させて頂きました。すると、ペットボトルなどは全く土に還ってなく、さらに野生の動物にも悪影響を与えてしまうそうです。ポイ捨ては環境に悪いのだと改めて知ることができました。

私は、ボップルトに行かせて頂いて、今まであまり考えたことのない環境について考えることができました。

日本もすぐにはできるか分かりませんが、一人ひとりが環境について考え、ボップルトのように綺麗な街並みにしたいと思いました。



5 参考資料

(1) 平成28年度事業スケジュール

月 日	内 容
4月 8日 (金)	校長会にて派遣概要報告 (全員公募へ変更)
5月 1日 (日)	広報おうめ・ホームページ等で団員募集開始
5月16日 (月)	団員募集締切
5月22日 (日)	団員面接試験実施
6月 8日 (水)	第1回事前研修 (姉妹都市提携の概要、派遣の意義等説明)
6月19日 (日)	第2回事前研修 (親子研修、ドイツ語講座、青梅市のごみ処理研修、歌・よさこいソーラン練習等)
7月10日 (日)	第3回事前研修 (親子研修、団員決定、ドイツ語講座、歌・よさこいソーラン練習等)
7月13日 (水) ～22日 (金)	ボッパルト市へ派遣
8月23日 (火)	第1回事後研修 (親子研修・帰国報告、派遣報告会準備等)
8月28日 (日)	第2回事後研修 (派遣報告会準備等)
9月 4日 (日)	第3回事後研修 (派遣報告会準備、派遣報告書提出)
9月16日 (金)	派遣報告会
	派遣報告書発行

(2) 事前研修・事後研修の様子

第1回事前研修

姉妹都市交流の歴史・交流、青少年派遣の意義等を学びました。



第2回事前研修

親子研修、ドイツ語講座、青梅市のごみ処理学習、よさこいソーラン・歌の練習をしました。



<前回派遣団員との交流>



第3回事前研修

最終確認、団員決定通知交付、ドイツ語講座、よさこいソーラン・歌の練習をしました。



第1回事後研修

保護者への派遣報告と派遣報告会の説明、発表原稿の作成を行いました。



第2回事後研修

発表原稿の作成とリハーサルを行いました。



第3回事後研修

派遣報告会に向けて、リハーサル、原稿修正を繰り返し行いました。



(3) 派遣報告会の様子

写真や映像をスクリーンに映しながら、事前研修や派遣期間中の日程の説明、民泊家庭とのエピソードおよび事後研修の内容などを報告しました。

発表を行う団員たちの姿は、派遣前よりも堂々とした自信あふれるものでした。

全ての報告を終えると会場から温かい拍手をいただき、団員たちはホッとした表情を浮かべていました。



《派遣報告会後の記念撮影》

派遣報告会を終えると、第16回青梅市青少年友好親善使節団としての活動はひとまず終了です。

しかし、本当の意味での姉妹都市交流は始まったばかりです。団員には、青梅市とボッパルト市との姉妹都市交流を広く伝え、そして、今後の姉妹都市交流に積極的に関わって欲しいと思います。

青梅市とボッパルト市は、2015年に、姉妹都市提携50周年を迎えました。

また、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会に向けて、青梅市はドイツのホストタウンに決定しました。更に、2020年は姉妹都市提携55周年を迎えることから、ボッパルト市から多くの方が青梅に来られることと思います。

これからの皆さんの活躍を、心から期待します。

第16回青梅市青少年友好親善使節団



派遣団員募集案内



この夏、姉妹都市ポッパルトへ！ あなたも参加してみませんか？

(第16回ポッパルト市への青少年友好親善使節団派遣事業 主催：青梅市)

【事業目的】	青梅市の姉妹都市ドイツ・ポッパルト市へ青少年を派遣することにより、両市の友好親善を深めるとともに、国際的視野に立つ青少年の育成を図ることを目的としています。
【募集対象】	青梅市在住の中学2年生から平成28年度に20歳を迎える方 (注1) 学生・社会人等を問いません。 (注2) 今回より青梅市立中学校からの推薦はなくなり、全員公募となります。
【派遣先】	ドイツ連邦共和国ラインラントプファルツ州ポッパルト市
【派遣期間】	平成28年7月13日(水)から7月22日(金)までの10日間 (青梅市立中学校の生徒は「欠席扱い」にはなりません。)
【応募資格】	① 青梅市在住の中学2年生から平成28年度に20歳を迎える方 (今までにこの派遣事業でポッパルト市へ派遣された方は除きます。) ② 心身ともに健康で、協調性に富み、規律ある団体行動ができること (滞在期間中はポッパルト市側で組まれたプログラムに沿って行動します。) ③ 派遣後も、民泊受入れやイベントへの参加等で青梅市の姉妹都市交流事業や国際交流事業に協力できること ④ 青梅市が実施する事前研修および事後研修に参加できること (事前研修を修了した方が正式に団員となります。) ⑤ 帰国後に開催する派遣報告会に参加できること(9月中旬予定)
【募集人員】	10名
【費用】	派遣にかかる航空運賃、空港施設使用料、空港税、燃油サーチャージ、海外旅行傷害保険料、市役所・空港間送迎バス代は青梅市が負担します。それ以外の個人で必要な経費(パスポート取得に関する費用等)は、団員本人の負担となります。
【宿泊】	ポッパルト市での宿泊は、ホームステイとなります。
【選考方法】	作文審査と面接
【申込方法】	下記に記載の申込受付期間内に所定の申込書に記入の上、写真(カラー)を貼付し、作文と一緒に市役所本庁舎4階秘書広報課広聴・国際交流担当窓口へ直接持参または郵送してください。(作文は自筆に限ります。) 送付先：〒198-8701 東京都青梅市東青梅1-11-1 青梅市役所企画部秘書広報課広聴・国際交流担当
【申込書・原稿用紙】	青梅市のホームページからダウンロードできます。また、市役所受付、秘書広報課広聴・国際交流担当窓口、各市民センター、中央図書館で配布します。
【申込受付】	平成28年5月16日(月)まで(郵便の場合は、5月16日の消印有効) 午前8時30分から午後5時15分まで(ただし、土・日・祝日は休み)

【 作 文 】	所定の原稿用紙に800字程度の作文を作成し、申込書と一緒に提出してください。 ※作文は自筆に限ります。（パソコン・ワープロ等不可）
【作文のテーマ】	①「国際交流、あるいは国際理解について」 ②「ドイツ（ポッパルト）に行って学びたいこと」 ※どちらか1つ選んで書いてください。
【面接日と会場】	平成28年5月22日（日）午後（各応募者の面接時間は別途連絡します。） 会場：青梅市役所4階403会議室（控室：市役所4階402会議室）
【選考結果】	5月27日までに応募者全員に通知します。
【事前研修】 （ 予 定 ）	第1回：6月 8日（水）午後7時～ 青梅市役所4階403会議室 第2回：6月19日（日）午前・午後 青梅市役所2階会議室 第3回：7月10日（日）午前・午後 同 上
【事後研修】 （ 予 定 ）	第1回：8月23日（火）午後7時～ 青梅市役所2階会議室 第2回：8月28日（日）午前・午後 同 上 第3回：9月 4日（日）午前・午後 同 上
【派遣報告会】	9月中旬の夜間を予定 市役所2階会議室
【問合せ先】	青梅市役所企画部秘書広報課広聴・国際交流担当 電話番号 0428-22-1111（内線）2416 午前8時30分から午後5時15分まで（ただし、土・日・祝日は休み）

○ ライン川沿いにある姉妹都市公園



○ ボッパルト市の新聞に掲載

Neues aus den Partnerstädten Boppard

Jugenddelegation aus der Partnerstadt Ome angekommen

Die 18. Jugenddelegation aus der Partnerstadt Ome verweilt zur Zeit in Boppard. Die Gruppe besteht aus 10 Jugendlichen im Alter von 13 bis 19 Jahren sowie dem neuen Bürgermeister der Stadt Ome, Herrn Keiichi Hamanaka, als Delegationsleiter und Herrn Yutake Hoshino, leitender Mitarbeiter der Stadtverwaltung Ome. Kaum in Boppard angekommen stand ein Besuch im Partnerschaftsgarten auf dem Betheesed Gelände im Programm. Hier ist auch die Steinpyramide. Alle Gäste aus der Partnerstadt Ome bringen immer einen Stein aus dem Tama Fluss mit. Somit wird diese Pyramide immer wachsen.

Sitz: Nabeck-Belbaur

Blick im Boppard

Jugenddelegation aus der Partnerstadt Ome angekommen

KW 29/2016 | Jahrgang 16 | 7.700 Auflage

Blick im Boppard

Jugenddelegation aus der Partnerstadt Ome angekommen

Lesen Sie auch den Blickbeitrag im Innenenteil

Aus dem Inhalt